



TITLE:

京都外科集談会抄録

AUTHOR(S):

---

CITATION:

京都外科集談会抄録. 日本外科宝函 1953, 22(5): 568-571

ISSUE DATE:

1953-09-01

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/206014>

RIGHT:

## 京都外科集談会抄録

昭和28年5月例会

## (1) 十二指腸穿孔による横隔膜下膿瘍の一治験例

横山 敏

十二指腸穿孔後3ヶ月に至り右季肋部痛、発熱、呼吸困難等典型的な横隔膜下膿瘍の症状を呈した50才男子の一症例で術前に局所浮腫、圧痛及びレ線検査で膿瘍の部位を確認切開排膿により全治せしめた。十二指腸穿孔部は前腹壁に癒着、湿出物による感染は腹壁を経腹膜的に腹膜の前面を上行して横隔膜下腔右上前、腹膜外の部に膿瘍を形成したものと考えられる。切開により生じた十二指腸瘻は食餌療法、充分な排膿による膿瘍腔内への膿汁滞留防止等により術後40日で完全に閉鎖した。文献的考察により元来困難視されていた十二指腸穿孔による横隔膜下膿瘍の治療も、手術法の選択改善、有力なる後療法更に化学療法の発達により漸次進歩しつつある事がわかった。

## (2) 我が教室のキューンチャ氏骨髓内固定法の経験

桐田良人・林瑞庭

我が教室に於ては、今日迄大腿骨骨折9名、上腕骨骨折1名、上腕骨骨折兼両腕骨骨折1名、前腕両骨骨折1名下腿両骨骨折3名計15名を経験致した。両前腕骨骨折の骨端に近い骨折1名を除き機能上、変形上略満足すべき成績を得ました。結論としては、

- 1) 大腿骨骨幹横骨折、変形治癒骨折偽関節に対して本法による処置は甚だ優秀であること。
- 2) 幼児に施行して些力も支障のないこと。
- 3) 認むべき合併症がないこと。
- 4) 鋼釘の存置に依る仮骨形成への影響は殆んど認められないこと。
- 5) 鋼釘の抜去は位置を充分確めた上では甚だ容易で多少の屈曲があつても例外でないこと。
- 6) 手術操作が簡単なため、手術時間は短時間で軟部組織を損傷することの少ないこと、等である。

## (3) レイノー氏病1症例

沢田 蘇 庵 三

本邦で珍らしいと思はれる、比較的初期で血管痙攣性発作以外の障害を示さない一症例を経験した。

症例、患者は37才、既婚、農婦。

主訴、四肢末端に於ける寒冷とシビレ感。

現病歴、一昨年秋以来、冬季寒冷に暴露すると、左右対称に四肢の末端に寒冷及びシビレ感を来す様になり、温めると3〜5分程で、元に戻る。

入院時所見、右環指末節は関節離断術をうく。左右拇指末節、他の四肢の中節、末節、及び左右全趾末節に於て、表皮は蒼白色貧血性、局所体温降下を認め、湿潤である。以外には形態や長さ運動性等に異常なし。

手術、上膊動脈壁交感神経切除術、星状神経節に対する。又ベルカイン及びアルコールによるブロック、更にその切除を試み、軽快す。本病の診断、手術法、その効果、再発等に關して、文献的考察を試みた。

## (4) 胃切除後重篤なる通過障害を来せる症例の統計的觀察

杉本雄三・東健一郎

我々は昭和24年9月より同27年8月迄の最近3年間、外科第Ⅱ講座で胃切除・胃腸吻合・食道十二指腸吻合・食道空腸吻合を受けた患者の中で、術後重篤なる通過障害を来したものと対照として、ベニシリン使用以前の昭和16年1月より同17年12月迄の2年間の同症例を統計的に觀察し、次の結論を得た。

- (1) 最近3年間の術式は、BⅠ法・BⅡ法中結腸前吻合・結腸後吻合の頻度は、三者略々同数であるが、通過障害の頻度はBⅠ法に少くBⅡ法に高率である。
- (2) 通過障害の原因としては、癒着によるもの最も多く、縫合不全・癌性浸潤之に次ぎ、その他縫合固定の不適確・胃遊離の不適当・輸出脚と輸入脚の捻転等があつた。
- (3) BⅡ法結腸前後ともに、ブ氏吻合を附けた例にては通過障害は全く見られず、ブ氏吻合を附けないものに高率に通過障害が認められた。又無ブ氏吻合例中通過障害を来したものに、再開腹・ブ氏吻合追加を行つて救ひ得た例も数例ある。この事実から、手術中に通過障害が予想される原因がある場合には進んでブ氏吻合を附けるべきであると言いたい。

## (5) 推間板游離片による根性坐骨神経痛

土 居 秀 郎

## (6) 大量肛門出血を来せる迴盲部結核の治療例

西 田 三 郎

## (7) ミエログラフイーの信用度

藤 田 榮 隆

## (8) 馬尾神経癒着症の1例(興味ある下肢知覚並びに反射障害に就て)

中 山 昌 和

## (9) 骨盤切除の一例

九間外喜雄

## (10) 虫垂炎と誤診した卵巣出血の一例

日立安来病院

外科 池内 彰

婦人科 早田 幹夫

急性貧血症が全く欠如していた事と、性器出血がなかつたために、所見にやゝ不審な点があつたのに、深く考察する事なく急性虫垂炎と誤診した一例を簡単に報告したのであるが、本例に於ても現病歴をよく考え、得た所見に就て検討してをれば、或は虫垂炎でな

いてあろう位の診断はなし得たであろう。要は成熟婦人の場合は、まぎらわしい場合は、月経周期との関係、性交渉の有無等をかなり詳しく聞いておく事が必要であり、不審な時には一応婦人科の診察を求めるか、或はダグラス窩穿刺位はやつて見る必要がある事を強調したい。

## 副角妊娠破裂の一例

武藤勇哉

32才未産婦で、子宮掻破術実施後、右副角妊娠破裂(4ヶ月半)を来し、開腹術により救命しえた1例を報告した。

## 昭和28年6月例会

## (1) 椎弓切除術に於ける出血量

相馬秀臣

椎間軟骨ヘルニアに対し我々の教室に於て行われている骨形成的片側椎弓切除術に際して、その術中の出血量測定を行い併せてこの手術の全身に及ぼす影響について検査し、次の如き結果を得た。

1) 出血量を測定した所、(重量法による)最低89g、最高1096g、で平均300~500g内外の値を得た。

2) 出血量の大部分は、椎弓切除後椎体後面にある脊髄静脈叢の損傷によるものであつて、出血量の大小は手術者のこの部の止血操作の巧拙により影響される事がわかつた。

3) 手術時間は最低1時間25分、最高2時間55分で平均2時間より2時間30分を要し、出血量と手術時間の長短は比例している。

4) 血圧は最高、最低共に、術前、術後の間には差が認められなかつた。

5) 血沈値は術後1週目にもつとも大なる値を示し、それより漸次回復し、4~5週目で大体術前値に近くなる。

## (2) 廻腸末端炎のオーレオマイシンによる治効例

吉川昭治

患者17才男子。臨床症状は急性虫垂炎と類似し開腹術により廻腸末端より口側10cmに及ぶ廻腸に境界明らかな充血、浮腫、肥厚著明で軽度の腸管狭窄あり同部の廻腸腸間膜淋巴腺指頭大から小指頭大に5乃至6個腫脹せる急性に來た廻腸末端炎に虫垂切除のみ施行せるも術後体温下降せず39度3分に及んだがオーレオマイシン毎4時間250mg 総量4.75gの径口投与で治癒せしめ術後何等障害を残さなかつた。

尙急性症に対して我国文献による26例に就て治療法を統計的に観察して廻腸末端炎の急性症は姑息的方法にて充分治癒せしめ得る事を認めた。

## (3) 特発性食道拡張症の手術例

田辺賀啓

特発性食道拡張症の手術治験例は本邦では未だ比較の少く、最近、器質的疾患と紛わしかつた本症の一例に気管内麻酔下で洞肋膜開胸術、食道遊離成形術を施行し治癒せしめ得たので、その経過、考察を述べ併せて該症に対する外科的治療に就て言及した。

1) 本症例には自律神経系統の不安定が見られた。

2) レ線透視で狭窄部に鋸齒状陰影を思惟したのは食道内に停滞せる食餌の爲と考えられた。

3) 薬理学的レ線診断法としてパバジェリン・アドレナリン法を実施したが陰性であつた。斯る薬物診断法は陽性の際は診断に利用し得るが陰性の場合には直に之を否定し得ないものである。

4) 食道疾患の診断にはレ線検査と食道鏡検査とは是非行ふべきものである。特に食道に蠕動存在し、薬理学的レ線診断法陰性の際には器質的疾患との鑑別は慎重にすべきである。

5) レ線透視所見と臨床症状とは必ずしも平行せず、一般にレ線所見に比して臨床症状は遙に良好である。

6) 現在、米国ではGröndahl氏食道胃吻合術、時にはWendel氏噴門成形術を、英国及歐洲では主としてHeller氏法が多く用いられている様である。

7) 最近22年間の本学外科での本症手術例は7例にして、6名は大沢氏食道遊離成形術、1名は食道胃吻合術で何れも全治、良好なる成績を得ている。

## (4) 幼児の病的脱臼に対する股関節改造術の経験 特に其の術後変化に就いて

藤田英和

骨頭が全く消失し、頸部の一部残存している所の幼児の陳旧性病的脱臼に対し股関節改造術を行つた所、術後時日の経過と共に増々機能的にも解剖学的にも正常股関節の状態に近づく様な自家改造が現れて來た。此の事は注目に与する事と思われるので報告した。

## (5) 鼻根部外傷後の顱瘤の一例

長 洋

30才の男子。鼻根部外傷後、数年後に顱瘤様発作あり。右側嗅覚減退、右鼻腔は、鼻中隔と鼻堤の癒着、篩骨漏斗部に穿孔、膿汁流出、粘膜の浮腫状肥厚あり。脳脊髄液検査著変なし。

Pneumoencephalography による脳室像は高度に拡張、且つ彌蔓性脳萎縮を認む。脳波測定によれば右頭頂部に異常波を認む。

手術所見。右前頭極、眼窩上壁全部の前頭部の硬膜と脳皮質と緻密に癒着す。又この癒着は左側、前頭葉に及んである如く思われた。

脳皮質組織標本。脳皮質膿瘍形成なし。

外傷性篩骨蜂窠炎より惹起せられたと思われる脳膜炎後遺症の1例を報告する。鼻性頭蓋内合併症は前頭葉に多く、後遺症として顱瘤は重要である。

## (6) 幽門狭窄を惹起し術前診断困難なりし部位錯迷脾臓症の一例

伊 井 政 義

1) 幽門狭窄の症候を呈し術前診断困難であつたが開腹手術の結果幽門部前壁に於ける部位錯迷脾臓症と診断された一例を報告した。

2) 幽門部前壁に存在した帯白色、漿膜面粗大、顆粒状、弾性軟の硬結が幽門部に痙攣性に作用したものと考えられる。

3) 術前幽門部に鶏卵大の腫瘍らしきものを触れたがこれは此の Spastisch なる幽門部を触れたものであると考えられる。

4) 前記硬結は組織学的検査により脾臓の一部なる事が判明した。

5) 患者は胃切除術により術前の症状は全く無くなり術後3週間目に全治退院した。

質問 お尋ねしますが、幽門痙攣を起したのは、異物作用としてでしょうか或は何か分泌作用と云ふ事によるものでしょうか、お教え下さい。(杉本)

本庄 副脾の所在する位置が腸管平滑筋に直接、接して存在しているので、その機械的刺激により平滑筋の攣縮を起すものと通常考えられている。

## (7) T. P. D の使用経験

土 居 秀 郎

本学衛生学教室の藤原助教が「にんにく」の分析中分離した所の T. P. D (Thiamine-Propyl, Diphosphatid, Allithiamine) を各種神経疾患に使用した結果について報告し、追試を乞うた。尚、T. P. D の特性として、在来の V. B<sub>1</sub> 塩酸塩と異なる点は、

1) 経口的にも非経口的にも著明に血中濃度が充進すること。

2) 排泄されるのに、可成り長時間を要すること。

3) 臓器沈着性は、極めて強く、肝臓に於ては従来の V. B<sub>1</sub> の2倍量となる。

4) 鼠 (Ratte) の成長試験では T. P. D > V. B<sub>1</sub>

5) 致死量 (Maus) V. B<sub>1</sub> 1.1mg/10gr  
T. P. D 3.5mg/10gr

6) V. B<sub>1</sub> 欠乏症に対する効果、T. P. D ≥ V. B<sub>1</sub>

7) 白血球游走速度が増加す (活潑となる)。

## (8) 胆石症の数例

武 藤 勇 哉

症例1は55才の女子の胆石症で、マラリアか、敗血症か迷わされたもの、

症例2は66才の男子で、敗血症様の熱と、アグラモロチトーゼを来し、大量の抗生物質を使用したか死亡し、剖検によつて胆石症に基因したことの判つたもの、

症例3は46才の女子の胆石症で、術前虫垂炎性膿瘍を思わせたもの、

症例4は72才の女子の胆石症で、術前癌か、腸重積症を思わせたもの、

症例5は71才の男子で、臨床症状から胆嚢炎を疑つたが、開腹により胃癌とその肝転移であつたもの、

以上の5症例を報告した。

武藤先生への追加

杉 本 雄 三

只今胃癌患者で術前マラリア様熱発作を起していたのが胃腸癌のみで熱発作が消失したとの事ですが、私も注意して胃癌の発熱患者を見ていますと、胃液の細胞学的所見、剔出標本の肉眼的、組織学的所見から、発熱を来す要素は、従来云われてるような癌の有毒物質の吸収と云う事のみでなく、組織の壊死物質、食物の停滞、腐敗、吸収と云う事も大きく関係するようになっています。だから吻合によつて解熱したのでないでしょうか。

## (9) 開放性頭蓋骨陥没骨折に起因する外傷性脳膿瘍の一例

安 藤 協 三

開放性頭蓋骨陥没骨折に起因する外傷性脳膿瘍の一例を報告する。患者は満3年の男児、左側偏癱を主訴として来院。外傷性脳膿瘍と診断して即日切開排膿した所、術後著明な脳脱を生じたが、表面に肉芽組織を生じたのでルベルダン氏植皮術を行い、著しく経過を縮めて術後80日目に全治退院せしめた。而も脳脱による脱落症状は全く見られなかつた。

次いで外傷性脳膿瘍の発生機転、本例に就いて行つた手術的療法に就いて若干の考察を加え、最後に将来痙攣発作の起る可能性を考えてその予防的処置についても言及した。

## (10) 両側性腹腔内停留畢丸の一例

伊 勢 田 幸 彦

症例。22才の男子、農業。両側畢丸の先天性潜伏を主訴として来院す。分娩満期安産で、当時より両側陰嚢、鼠径部に畢丸のない事を指摘されていた。尚幼少の頃より陰莖及び陰嚢の發育不全を認めていた。下腹部疼痛を来した事なく、性欲あり勃起する事はあるが

射精は認めた事はない。全身所見は著変なく、局所々見として、陰茎、陰囊の發育極めて不良で、陰毛の發生未だ認めず。7～8才の男児の外陰部の如くである。両側陰囊は全く空虚で睾丸は何処へも触知しない。Thorn's test-78% 正常、尿中 17KS, 6.17mg/24h で低下。血清ワ氏反応陰性、手術所見、両側共睾丸は蠶豆大の膨隆を有する索状となり、内鼠径輪より1～2横指上方の腹膜前脂肪組織内に存在していたが、両側共陰囊のは、中央部迄下降固定した。術後諸種のホルモン療法を行い、尿中 17KS 排泄量を検査したが、Testosterone Propionate の注射で、尿中 17kS 値の上昇を認め、且つ外陰部の著明な發育増大を認めた。

(11) 右鎖骨上窩に転移を伴った前縦隔基底細胞癌の別出例

伊勢田 幸彦

症例。46才、既婚の女子。入院約2ヶ月前より、両側肩凝り、軽度の咳嗽、喀痰を訴へ来院す。その頃より頸部の運動に際して、頸部より後頭部へかけて、神経痛様疼痛を来す様になり、又右鎖骨上窩に約胡桃大

の無痛性腫瘤あるに気付いた。約1ヶ月前、結核性胸部疾患の疑で、レ線撮影の結果、縦隔腫瘍と云われた。腫瘍による圧迫症状を欠如し、レ線検査の結果、前縦隔で殆ど前胸壁に接し、肺、気管支との関係のない事がわかつた。先づ右鎖骨上窩の腫瘍別出を行い、組織学的検査の結果、悪性前縦隔腫瘍の転移なる事を確かめ、次いで前縦隔切開により約鵝卵大の腫瘍を容易に剔出した。腫瘍は組織学的検査の結果、基底細胞癌なる事を認めた。今迄本邦で外科の対象となつた縦隔癌の報告はなく、米国では13例の報告をみるが、1例のみしか剔出例をみていない。本症例は主腫瘍の広範に拡る以前に、早期に転移を来した為、かえつて、容易に剔出出来た稀有な1例である。

(12) 肺臓癌の剔出治験例

緒方 武

(13) 腺細胞の分泌機序

武田 進

次 号 予 告

綜 説

肺臓免疫の特殊性..... 青柳 安誠

原 著

EXPERIMENTAL STUDY OF REFLEX SCHOCK. .... SHIGERU IIDA  
感電死の脳に於ける組織学的変化..... 波多腰 正彦  
GLIOBLASTOMA MULTIFORME に就て..... 黄 雲 裳  
所謂蜘蛛膜炎（頭蓋腔内）の成立機序に関する実験的研究..... 頼 島 元  
背負袋による上膊神経麻痺の臨床像とその発生素因に就て..... 島本 忠明・桑原 政一  
肺結核症に於けるリパーゼ及び脂肪の消長に関する実験的研究..... 財 津 晃  
骨形成的椎弓切除術の臨床的及び実験的研究..... 藤 田 英 和

臨 床

手術後食餌表と献立表の1試案..... 島本 忠明・桂 英輔・吉川 雪恵

症 例 報 告

典型的な虫垂癌の1例..... 源河 朝明・沢村 俊幸  
原因不明の胆道出血の1例..... 津 田 安・端野 博康  
離断性骨軟骨炎に就て..... 有原 康次・藤田 英和  
遊離椎間板片による根性坐骨神経痛 ..... 土 居 秀 郎  
肺臓癌の手術治験例..... 緒 方 武  
癩性神経炎患者の筋分布神経要素に就て..... 桐 田 良 人  
不動性萎縮筋に於ける神経要素に就て..... 桐 田 良 人